

あとがき

本書の執筆陣として、『ギッシング・ジャーナル』編集長のピエール・クスティヤス氏、そして常任編集委員のジェイコブ・コールグ氏と小池滋氏に特別参加していただいたことは、浅学非才の編者にとって望外の幸せであった。

特にクスティヤス氏には、この半年のあいだ陰に陽に力になっていただいた。フランスの方角に足を向けて寝ることができないほど、編者の心は感謝の念で一杯である。氏にとっては初歩的と思えるような質問を含め、幾たび相談に乗っていただいたか分からない。その意味で、氏が2000年から電子メールを始められたのは、編者にとって非常に幸運な（と言うことは、氏にとって不幸な）ことであった。クスティヤス氏は自他共に認めるギッシング研究の第一人者である。また、ギッシングに関することであれば何でも、例えば日本の大学で使用されている英語の講読用テキストに至るまでも、コンピュータ並みの頭脳にインプットされている文字通りの生き字引である。その該博な知識に裏打ちされた数多くの著書については、私たちの論文の中で必ずどれかが引用される。しかし、クスティヤス氏はただ単にギッシングの学界における泰斗に留まらず、キプリング、コンラッド、ジョージ・ムア、ジャック・ロンドンの作品の編集と翻訳もあり、その数は枚挙にいとまがない。このような大先輩から懇到な指導を受けることができたからこそ、本書は曲がりなりにも総合的な研究書になり得たのだと思っている。そうでなければ、本書はギッシング没後100年を記念する普通の論文集になっていたであろう。クスティヤス氏は巻頭言を快く引き受けてくださっただけでなく、編者にとっては最難関であった第2章のギッシング批評史のために、今年の没後100年記念の国際ギッシング会議での講演原稿までも事前に提供してくださった。更に、「年譜」では『ジョージ・ギッシング書簡集』第9巻の「年譜」を利用する許可を、第3章「無階級の人々」では所蔵の写真を複製する許可を与えていただいた。この場を借りてクスティヤス氏に深甚の謝意を表したい。

コールグ氏は1960年代におけるギッシング・ブームの火付け役で、特に1963年に上梓された評伝と1965年に創刊された『ギッシング・ニューズレター』は、以後のギッシング研究に多大の恩恵を与えた。シアトル在住の氏は

既に80歳を越えておられるが、今年もまたエズラ・パウンドとH.D.の「冬の恋」に関する新刊を出された。その旺盛な研究欲には頭が下がるばかりである。コールグ氏は比較的早い時期(1997年)にインターネットを始められた。編者が最初にコンタクトを取ったのは、氏が担当された『文学人名辞典』第18巻の「ジョージ・ギッシング」の項目を電子化し、ウェブ上に公開させてもらうための許可を求めた時であった。その翻訳に対して不必要と思えるほどの詳しい訳註を付したのが、本書の第1章「ギッシングの生涯」である。今ではジョン・ハルペリンをはじめとする研究者たちの評伝が数点あるものの、編者にとって参照する回数が一番多い文献は、昔も今もコールグ氏の『評伝——ジョージ・ギッシング』である。1963年の初版は絶版になっていたもので、数年前に編者は氏と出版社の許可を得て、この評伝をそのままの形で電子化し、ウェブ上に公開させてもらった。本書の第12章「その他の長篇・中篇小説」は私たちの手に負えない章であったが、その意味において氏の評伝を取捨選択して翻訳する許可を得ることができたのは欣幸の至りである。本書がギッシングの主要作品だけでなく、すべての小説についての解説を収めることができたのは、ひとえにコールグ氏のおかげである。

日本でギッシング作品の翻訳と研究が一気に進み、世界のギッシング研究において日本もまた一目置かれているのは、小池氏の過去40年以上に及ぶ尽力の賜物に他ならない。『ニューズレター』と『ジャーナル』の編集委員として、日本で出版された翻訳や論文を詳しく報告され、「ジョージ・ギッシングの教育」といった評価の高い論文を発表されたことの意味は非常に大きい。周知の通り、小池氏にはディケンズに関する翻訳と著書が数多くあり、ギッシングの『チャールズ・ディケンズ論』も金山亮太氏と一緒に訳されている。ギッシングとディケンズの関係について氏以上に眼識のある批評が可能な研究者は考えられないので特別寄稿を願い出たわけだが、即座に快諾していただいた。第14章は、ディケンズ・フェロウシップ日本支部の『年報』第25号(2002年)に掲載された「ディケンズ批評——古典時代・発展の時代」におけるギッシングの項目を加筆・補正したものだが、分量が5倍近くになっているので、事実上の書き下ろしだと言ってよい。第15章の「ギッシング関連情報」で調査の結果に疑念が生じた際も、小池氏には幾つもの質問に答えていただいた。また、第10章「イオニア海のほとり」では、秀文インターナショナルの『ギッシング選集』第4巻に掲載された「南イタリア地図」の転載を認めてくださった。数々の師恩に対しては御礼の言葉もない。

ウェイクフィールド在住のアンソニー・ペティト氏には、本書のジャケット

トのためにリリー・ウォールドロンによるギッシングの肖像画の使用許可を取っていただいた。また、ギッシング・トラストとギッシング・センターに関する編者の様々な質問にも丁寧に答えてくださった。第15章第2節の内容は氏の労を多としている。編者が在外研究中にウェイクフィールドを訪問した際も、ベティト氏は団体ツアーのようにセンター内と市中のギッシングゆかりの地を案内してくださったが、氏の篤実な人柄と旺盛なボランティア精神には、ギッシングに対する汲めど尽きせぬ愛情を感じずにはおれない。

小池氏を除いた日本の執筆者10名に対してもまた、できることならば一人ずつに御礼を申し上げたい。今回もまた本書刊行に先立ち、意見交換を行なうために専用のメーリング・リストを立ち上げたが、編集方針を一方向的に押しつけるようなメールばかりが目立ってしまい、相当な迷惑をかけてしまった。執筆者の寛容な心に甘えてしまったことを謝罪したい。編者は3月末から集まり始めた原稿にレイアウトやその他の統一を施し、出版社に渡す前に電子ブックの形でウェブ上に置いて、執筆者たちに編集の進み具合を確認してもらった。最後に執筆者同士で相互の査読を行なったので、少なくとも第3章から第14章までは読みやすくなったはずである。それ以外の箇所についての責任がすべて編者にあることは言うまでもない。とは言え、本書の編集は一人によってなされたわけではない。本書巻頭の「文献一覧」についてはギッシングの研究歴が長い八幡雅彦氏の助力による所が大である。編者が翻訳した箇所に不自然な日本語が見られないとすれば、それは並木幸充氏と小宮彩加氏の校正のおかげである。並木氏と小宮氏には、気骨が折れる索引の作成に最後まで辛抱強く付き合っていたいただいた。また、第15章の「ギッシング関連情報」でリストアップされた日本における研究論文の大半は、ブロンテやギヤスケルに関する多くの文献目録を出版されている一橋大学図書館の飯島朋子氏に提供していただいた。もちろん、その他の参加者たちも様々な形で編集を支援してくださった。このように本書は多くの師友の援助があったからこそ、出版になんとか漕ぎ着けたのである。

末尾になって申し訳ないが、昨今の不況と厳しい出版事情にもかかわらず、本書を出版してくださった英宝社社長佐々木元氏、そして原稿の整備と校正などで一方ならぬ世話を受けた同社編集部の中野正夫氏に心から感謝の意を表したい。

2003年6月28日

編 者